オアシス

文責：副学長
桑 原 雅 次

出雲芸術アカデミーだより　２０１９年４月１２日発行　第１２号

本アカデミーの修了月を迎え、１年間の総決算となるファミリーコンサートが間近となりました。その前に幼児科の修了式も控えています。さて、世の中は、平成の終わりを迎え、５月からは新しい元号「令和」となります。この元号の選定にあたっては、日本の国書「万葉集」から引用されたとありました。文化の香り漂う新しい元号に、私たちがかかわっているアカデミー事業の「音楽」が後押しされているように感じ、勇気と遣り甲斐をいただいたように感じました。文化の向上がいかに市民生活を豊かにしてくれるのかを、努力を惜しまず伝え続けることが、私たちの大きな使命と強く感じているところです。

◎「出雲の春音楽祭２０１９」が盛況に終える！

今年も２週続けての公演となり、盛りだくさんの内容でお客様には満足していただけたのではないでしょうか…？　２公演ともなると集客数が気になるところですが、Vol.１の「出雲オペラ」は、ビッグハート出雲のキャパシティー３１５席に対し、３２０人の皆様にご来場いただき満席となりました。一方、Vol.２の「邦楽合奏と管弦楽」では、出雲市民会館のキャパシティー１，０１６席に対し、７８０人（７７％）のご来場があり、他の会場で多くの催し物が開催されている中で、市民会館に足を運んでくださったことに感謝感激をしたところです。

Vol.１の「出雲オペラ」は、G.ドニゼッティ作曲の「愛の妙薬」をキャストの皆さんが原語（イタリア語）で朗々と歌い上げ、観客の皆さんを舞台にくぎ付けにするなどホール全体が一体となっていました。また、バックコーラスを務めていただいた、本アカデミー講座の「アクティング・クワイア」の皆さんも発声に演技に素晴らしい活躍で、ユーモラスな演目に対して、堂々と演じ切っている姿に感心させられると共に、オペラの持つ魅力に観客の皆さんもさぞかし満足されたことと思います。これも、指揮者を務めてくださった“中井章徳”芸術監督と、本アカデミーのアーティスト・イン・レジデンスでもある演出家の“唐谷裕子”氏の指導力の賜物と感謝いたします。

Vol.２では、１部の「邦楽合奏」は、本アカデミー別科で講座として取り組まれている指揮者付きの合奏が特徴ですが、今年は西洋楽器（チェロ・ピッコロ・打楽器）との共演もあり、新しい感覚の邦楽の世界が鑑賞できたことは、観客の皆さんにとっても新鮮な気持ちで受け入れてくださったことと思います。

２部の「管弦楽」は、１００名からなる出雲フィルハーモニー・フェスティバルオーケストラが編成でき、プロ奏者、公募によるアマチュア奏者、そして本アカデミー講座のジュニアオーケストラからと、出雲フィルならではの多種多様なメンバー編成による公演となりました。曲目は、中学校の鑑賞教材でもあるB.スメタナ作

本番へ向けての練習風景

曲の交響詩「モルダウ」、R.ワーグナー作曲の楽劇＜トリスタンとイゾルデ＞から「愛の死」、今年で３年目を迎えた世界初演となる、本アカデミーのコンポーザー・イン・レジデンスでもある作曲家の平野一郎氏の作品、交響神楽第四番＜オホナムチ＞、第五番＜トリノアソビ＞と多彩なプログラムとなりました。交響神楽の第五番＜トリノアソビ＞では、児童合唱の出番があり、本アカデミーのジュニアコーラスの皆さんを中心に出雲第二中学校合唱部と出雲浜山中学校合唱部の皆さんにご協力をいただき、オーケストラと児童合唱の素晴らしい共演により、観客の皆さんからも高い評価を得たところです。

「出雲の春音楽祭」は、次年度には「間奏曲」特集が計画されています。平野氏にも間奏曲を依頼し、その次にいよいよ第六番となる＜クニユズリ＞で完結となる予定です。

これからも、本芸術アカデミーは、出雲フィルハーモニ交響楽団を核として、市民と一体となった芸術文化の発展に寄与できるよう努力を続けていきたいと思います。

◎ ライブ音楽のすごさを感じてほしい…！

数年前にある著書に出合い、私自身の考え方と同じだと共感を覚えた作者がいました。その著書名は「すべては音楽から生まれる」、著者は脳科学者の“茂木健一郎”氏です。この著書に出合ったことから、ライブ音楽（生演奏）に対する素晴らしさを改めて感じるとともに、脳科学的にみてもすごいことが理解でき、意を新たにしたところです。

その内容をごく一部ですが紹介させていただき、併せて感想を述べてみたいと思います。

ライブ音楽のすごさは、「あの日のあの瞬間、あの舞台、あの聴衆でなければ決して起こりえなかった事」が体現できることだと述べています。また、ある音楽体験において、どれだけ文字や数字を尽くしても、実際に何が起きているのかは、説明できない事であり、これが、音楽の魅力であり、すごさだと思うと述べられています。物理学、法学、生物学、脳科学を研究してきた著者が、音楽にはかなわないことを認めた素直な気持ちを述べられていました。

一方で、音楽体験の豊かさや感動の深さという点では、「生演奏」に勝るものはないと強調されてます。どんなに素晴らしいライブでも、録音では、演奏会場での感動と同じものを享受することはできないと言い切り、脳へサインを送るというものを考えると、CD や DVD の音は、生演奏を決して超えられないのであることが語られています。それ以上に、録音・録画されたものは、いわば死んだ情報が再生されているにすぎなく、生演奏は、今、ここで、生きているものであることを述べられています。そして、オーケストラの人たちも聴衆も、同じ時間と空間で息をしていて、起こったことは瞬く間に過ぎ去り、再び帰ってこないし、戻ることもできないこと。それが、たった一度の出会いを求めて生演奏を聴きに行くことに大きな意義があることを脳科学者らしく説明されていました。

まだまだ音楽の素晴らしさを語られていますが、紙面の都合によりここらで終わりとします。毎年、ゴールデンウイークの時期に、東京国際フォーラムを中心として丸の内地区でクラシック音楽祭が開催されています。「ラ・フォル・ジュルネ」という音楽祭で、会期中に二百を超えるプログラムが組まれるそうです。料金も千～三千円と割安で、小さな子どもも積極的に受け入れているとか…。国内外の一流アーティストたちの演奏が、朝から晩まで絶え間なく鳴り響く音楽祭と聴いています。是非、行ってみる価値はありそうです…。ライブ音楽（生演奏）を大いに楽しみましょう。

【このたよりは、本アカデミーホームページでも掲載します http://izumo-zaidan.jp/academy/】